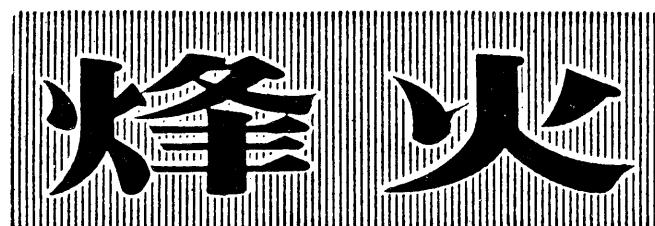


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義
の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争
—世界プロ独を組織する世界単一党を
国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1982年
1月 20日
第 341 号
編集発行人 高木一夫
一部 200円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東 2 丁目 2 の 31
とみやビル 15 号 Tel(06)371-3706
○郵便振替 大阪 3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫
■ 東京戦旗社 東京中央郵便局 私書箱 1114 号

全世界に
帝・社帝打倒、中国路線止揚の
インターナショナルの旗を!

共産主義者同盟
全国委員会

写真は81年12月戒厳令下のポーランド

八〇年代半ばの帝國主義的労戦統一抗争

七〇年代から八〇年代初頭にかけて世界資本主義は、戦後の相対的安定期の一時代を終え、三〇年代に類比される歴史的危機の時代に入りた。それは米ソ軍事対立を頂点に帝国主義間の矛盾を尖鋭化させ、同時に三ブロック（帝国主義国・労働者国家・第三世界諸国）階級闘争の自然発生的高揚の基礎を準備した。戦後世界支配体制としてのヤルタリジーネーブ体制は完全に崩壊し、新たな世界支配をねらう帝国主義・社会帝国主義とプロレタリア人民の世界的攻防戦が開始された。歴史的視野からみたときそれは「過渡期世界のプロレタリア世界社会主义革命による止揚」の一歴史段階が本格的に開始されたことを意味している。だがしかし他面、こんにち國際階級闘争は世界革命を領導する有効な新しい社会主義勢力の成長をつくりだしていなかったわけではない。かつて反帝民族解放闘争を社会主義革命へと止揚する実際上の勢力たりえ、また被抑圧民族間の民族矛盾を實際上克服するうえでの指導党派たりえた中国共産党は、七年ベトナム解放以降の新局面のなかで明白な世界的限界にいたついた。

分断された各国の階級闘争は、その明確な統合環をもちえぬまま、民族主義的反抗や民主主義的反抗の外皮の下から、世界革命への歴史的胎動を開拓しはじめている。全世界の革命的プロレタリアートは、その一見、非社会主義的世界的混乱とも見える國際階級闘争の新たなうねりを、世界プロレタリア独裁樹立・世界単一党建設の路線のもとに統合するためのたたかいにとげていることにある。

世界資本主義の危機

戦後世界資本主義の相対的安定期は、七四五七年の第一次石油危機をもって完全に終えんした。過剰生産恐慌の波は全世界をおおいつくし、国家財政支出の拡大によって景気を刺激し不況からの脱出をはかるという伝統的な国家独占資本主義的政策は破綻をとげ、インフレと不況の並存・スタグフレーションは資本主義諸国の常態となつた。七九・八〇年の第二次石油危機はこれにいつそう拍車をかけ、いまや世界資本主義は戦後最大の危機

の要素は、資本主義の世界的危機の深化であり、またこれを革命的危機へと転化できぬストーリン主義社帝が全世界でプロレタリア階級闘争の桎梏物、阻害物としてますます純化現代世界を特徴づけるもっとも大きな客観的要素をむかえようとしている。

主要資本主義諸国では、経済成長はのきなり、CDの経済動向予測によれば、西ドイツ・イギリス・フランス・イタリアの西欧四ヶ国の一〇年度で、日本・西ドイツをのぞき、イタリア（二一%）、イギリス（一八%）を筆頭に二ヶタ台に達した。さらに失業率もここ数年間に上昇をつけ、EC諸国では八〇年一年間に増加した一八〇万人をくわえ、八一年一月現在、総数八四四万人、失業率七・七%といふ過去最高を記録した。

これらうち顕著なことは、長年にわたり世界資本主義の首位の座を占めつづけてきたアメリカ資本主義の相対的地位が急速に低下していることである。八〇年のアメリカ国内経済は成長率マイナス〇・二%、物価上昇率

ノ・中国路線止揚！」——これが世界革命の前進のためにかけられるべき今日的な国際主義の单一の実践的旗印である。この国際主義的任務とむすびつけてわれわれは、自国帝国主義（日本帝国主義の侵略反革命戦争・ファシズム準備とたしかに、自国のプロレタリア大衆を社会主義（武装蜂起・プロレタリア独裁）の道へと組織していく任務をなわねばならない。わが国においても資本主義の危機は広範な人民の階級闘争への参加をますます不可避としており、また人民の社共にたいする階級的絶望は着実に増大している。これを革命運動の前進の条件に転化すべくわれわれは、プロレタリア階級の第一次的団結とその運動の内部から、革命的プロレタリアートを系統的に建設し獲得していく事業に真正面からとりくまねばならない。とりわけ八二年の全過程をつらぬいて拡大するであろう帝国主義的労戦再編をめぐるプロレタリアートの活動と分解に介入し、この内部から日本帝国主義と全面対決する政治闘争を組織し、新たな階級的労働運動の奔流を創出するたたかいはきわめて重要なものとなる。三〇年代におけるファンズムへの帝国主義諸国労働運動の総敗北、六〇年代末、ベトナム反戦闘争の高揚とむすびついてたたかれたわがブンド階級的労働運動の一旦の挫折、これらを実践的に突破しうるたたかいの構築が要求されている。そしてこれを領導する社共にかかる革命党の強固な建設こそわれわれの焦眉の課題である。

一、世界危機と階級闘争の昂揚

一三・五%、失業率七・二%と依然低迷を脱することができる、その結果、世界GDP総額に占めるアメリカのシェアは七〇年の三五・八%から七九年には二三・六%に低下し、輸出シェアも七〇年の一五・三%から八〇年には一二%に下落した。

他方、世界資本主義の危機と連動して、ソ連・東欧諸国などのコメコン体制下での経済的危機もまた拡大しつづけている。八一年二月のソ連共産党二六回大会においてブレジネフが「第二回大会（七六年）以降の時期を全体として見るとそれは容易な時期ではなかった。国民経済の発展の分野でも困難はすぐなくなかつた」と報告せざるをえなかつたよう、ソ連経済は急速な落ち込みを開始し、経済成長率は七一・七五年の平均五・七%から七九年には二・五%と三八年以降の最低を記録し、農業生産はマイナス三・七%に一挙的に下落した。また貿易依存度の高い東欧諸国では石油危機の大波をもろにかぶって、経済成長率は七一・七五年の七・四%から七九年には二・三%へと大幅ダウンした。資本主義諸国からの巨額の借款導入によって七〇年代前半には十多近くの経済成長を記録したが

一ランドでは、一転して七九年にはマイナス2%に低下するという事態も生みだされた。これらを経済的基礎として帝国主義間の対立と市場再分割競争が不可避に激化しつづけている。各国資本主義は資本の集中と集積をはかり金融寡頭体制をつよめ、相互の国内市場への商品輸出・資本輸出をめぐる抗争をも激化させながら、總体として全世界にまたがる独自の権益圏の獲得・再分割をおしすすめようとしている。自動車・家電・鉄鋼・造船・工作機械などの輸出入問題での米・日・西欧諸帝間の抗争、さらに七〇年代に入つて新たな戦略産業として登場したコンピューター・エレクトロニクス、航空・宇宙、核エネルギーなどの諸産業での帝国主義間の主導権あらそい、また中東油田地帯を中心とした資源争奪抗争などとしてそれはたちあらわれている。そしてこの帝国主義間の抗争戦にソ連社帝もまた積極的に介入しようとしているのである。

世界資本主義の危機と帝国主義間対立の激化は、米帝においてレーガン政権を登場させた。そしてこのもとで米・日・西欧帝による対ソ対決と民族解放闘争圧殺を基調としたNATO・日米安保を軸とする侵略反革命同盟の再編強化、各国軍事力の増強、新植民地支配の強化が、かつてない規模でおしすすめられている。

米ソの政治的軍事的対立は、七九年のイラン革命とソ連社帝のアフガニスタン侵略を引き金にしてデタント（緊張緩和）＝米ソ密月期を崩壊させ、中東・東アジア・中南米そしてヨーロッパを焦点にして激化の一途をたどっている。「強いアメリカの再生」をかかげて登場したレーガン政権は、五年間で総額一兆五〇〇〇億ドル（約三三〇兆円）という史上空前の大軍拡予算案発表を皮切りに、エルサルバドルへの軍事介入、韓国全斗煥体制の正式認知、サウジアラビア・エジプトなど中東親米政権への軍事援助、リビア、朝鮮民主主義人民共和国にたいする軍事挑発など、一連の民族解放闘争圧殺の策動に着手し、他方、西欧への新型ミサイル配備、中性子爆弾の生産再開決定と欧州・中東・極東配備の示唆などをうちだした。そして膨張しつづける国家財政赤字を緩和するために、日帝・西欧帝にたいして防衛分担の増強を要求しつつ、全世界的な規模での戦争政策を遂行している。これにたいしソ連社帝もまた「帝国主義の侵略的策動への断固たる反撃」というレーニン的政策」「世界平和の維持のための軍事戦略的均衡」（ソ連共産党二六回大会報告）という名目のもと、GNPの10%以上の巨費をそぞぎこんで米帝との軍事的抗争に血道をあげている。しかしそれはアフガニスタンへの軍事侵攻やボーランド問題への態度にしめされるよう、国際階級闘争への弾圧の手段たりえて、けつしてこれを防衛し発展させるものでも

一ランドでは、一転して七九年にはマイナス2%に低下するという事態も生みだされた。これらを経済的基礎として帝国主義間の対立と市場再分割競争が不可避に激化しつづけている。各国資本主義は資本の集中と集積をはかり金融寡頭体制をつよめ、相互の国内市場への商品輸出・資本輸出をめぐる抗争をも激化させながら、總体として全世界にまたがる独自の権益圏の獲得・再分割をおしすすめようとしている。自動車・家電・鉄鋼・造船・工作機械などの輸出入問題での米・日・西欧諸帝間の抗争、さらに七〇年代に入つて新たな戦略産業として登場したコンピューター・エレクトロニクス、航空・宇宙、核エネルギーなどの諸産業での帝国主義間の主導権あらそい、また中東油田地帯を中心とした資源争奪抗争などとしてそれはたちあらわれている。そしてこの帝国主義間の抗争戦にソ連社帝もまた積極的に介入しようとしているのである。

世界資本主義の危機と帝国主義間対立の激化は、米帝においてレーガン政権を登場させた。そしてこのもとで米・日・西欧帝による対ソ対決と民族解放闘争圧殺を基調としたNATO・日米安保を軸とする侵略反革命同盟の再編強化、各国軍事力の増強、新植民地支配の強化が、かつてない規模でおしすすめられている。

米ソの政治的軍事的対立は、七九年のイラン革命とソ連社帝のアフガニスタン侵略を引き金にしてデタント（緊張緩和）＝米ソ密月期を崩壊させ、中東・東アジア・中南米そしてヨーロッパを焦点にして激化の一途をたどっている。「強いアメリカの再生」をかかげて登場したレーガン政権は、五年間で総額一兆五〇〇〇億ドル（約三三〇兆円）という史上空前の大軍拡予算案発表を皮切りに、エルサルバドルへの軍事介入、韓国全斗煥体制の正式認知、サウジアラビア・エジプトなど中東親米政権への軍事援助、リビア、朝鮮民主主義人民共和国にたいする軍事挑発など、一連の民族解放闘争圧殺の策動に着手し、他方、西欧への新型ミサイル配備、中性子爆弾の生産再開決定と欧州・中東・極東配備の示唆などをうちだした。そして膨張しつづける国家財政赤字を緩和するために、日帝・西欧帝にたいして防衛分担の増強を要求しつつ、全世界的な規模での戦争政策を遂行している。これにたいしソ連社帝もまた「帝国主義の侵略的策動への断固たる反撃」というレーニン的政策」「世界平和の維持のための軍事戦略的均衡」（ソ連共産党二六回大会報告）という名

はない。ともあれ「データントから新版の冷戦への転換」（ブレジネフ）という事態は、第三次帝国主義戦争の危機をはらんで進行しつづかるのである。

三 ブロツク階級闘争

しかし同時にこのような世界資本主義の危機と帝国主義間対立の激化は、全世界の階級闘争が広範なひろがりと先鋭的な質をもつて噴出する条件をつくりだしている。昨八一年の国際階級闘争の激化はまさにそのことを実証するものであった。

帝国主義

その第一は、西ヨーロッパ全域における反戦反核闘争にしめされた帝国主義足下での人民のたたかいの高揚である。

欧洲が米ソ核戦争の舞台とされることへの危機感を基盤とした西欧の新しい大衆闘争は八一年秋にピーカをむかえ、西ドイツで三〇万（十月十日）、イギリス二〇万（十月二十四日）、イタリア一五万（十月二十四日）、ベルギー一二〇万（十月二十五日）など近年にない広範な人民を結集し、一部に自然発生的な市街戦をもふくんで展開された。この背景をなしでいるのは、欧洲全体をおおう深刻な不況と労働者人民の失業・生活苦の増大である。それはついに世界資本主義の危機が、帝国主義本国の階級闘争にも火をつけはじめたことを如実に物語っている。アメリカにおける反レーガンの五〇万人デモ（八一年九月一九日）もこの一環に位置するものである。

この帝国主義諸国での新しい波は、六八年のフランスの五月革命がドゴールによる「混乱か秩序か」のつきつけの前に退潮していくよう、ふたたび鎮静を強いられるのであらうか。情況は六〇年代とは異なっている。まず資本主義の危機の深さにおいて、ついであらゆる既成の改良主義的な政策がますます無意味なものになりつつあるという点において。西欧の人民の政治的流動はいま、とりあえずは西欧社民諸党の分解に反映しているが、情勢はますもつとも先進的な部分に改良か革命かを直接に問うかたちで煮つまっていくであろう。このとき全人民的高揚のただなかにおいてプロレタリア階級の独自治的要請をつきだし、NATO・ワルシャワ軍事体制打倒、国際連帯、自國帝国主義打倒をかかげた眞の前衛党建設の問題は、もつとも根本的で死活にかかわる課題となるであろう。

労働者国家

第二には、八一年一二月一三日のヤルゼルスキ政権の戒厳令発動によって内乱状態に突入したポーランドを筆頭とする労働者国家内の階級闘争の激化である。

ソ連社帝の全面的支援のもとに登場した

「救国軍事評議会」は集会・デモ・ストライキの禁止、労働組合の活動停止、通信への検閲などを布告するとともに、独立自主労組「連帶」活動家や旧社会自衛委員会（KOR）指導者らを大量逮捕した。これにたいし全国一大型労働者を組織する「連帶」は「全国ストライキ委員会」の名でゼネスト指令を発し、グダニスク、ワルシャワ、クラコフなどの主要拠点工場でストライキに突入し、軍政との全面対決に入った。各地で軍隊・警察との攻防戦がくりひろげられ、カトビツェでは炭鉱労働者が坑内にたてこもって徹底抗戦を行った。

八〇年夏、ギエレク政権の食肉大幅値上げを発火点にしていっせいに噴出し、同年八月のグダニスク政労合意から「連帶」結成をかちとるにいたるポーランド人民のたたかいの意義は、労働者国家の政治的経済的危機の深さを白日のもとにさらけだしたこと、むろんとどまるものではない。彼らはポーランド労働者国家内においてもプロレタリアートの階級闘争の発生は不可避であり、それはいくらかの経済状態の改善や政治支配の緩和によって消滅するものではなく、本質的にはソ連社会支配の打倒、統一労働者党権力の奪権、プロレタリア民主主義（＝プロ独）の確立にまでいきつく必然性をもつていてそれを身をもつてしめたのである。だから戒厳令直前の十二月十二日、「連帶」全国委員会で①ヤルゼルスキ政権不信任への賛否②暫定政権構想への賛否③ポーランドでのソ連の軍事的利害保障への賛否の三点を問う国民投票実施に関する提案がおこなわれ、ポーランド人民が權力をめぐる闘争へ踏みだそうとしたことは「連帶」運動の当然の帰結であった。

五六年ハンガリー事件、六八年チエコ事件とつづき、八〇～八一年にかけてポーランドで開花しようとした労働者国家内の階級闘争は、ソ連社帝支配を弱化させながら、不可避に東欧諸国に波及していくであろう。またポーランド人民のたたかいは、ソ連社帝らによつてふみにじられた社会主義の權威の失墜に歯止めをかけ、社会主義への新しい期待と希望を全世界の人民のなかにつくりだしていくであろう。これを恐れるソ連社帝は「連帶」に反社会主義のレッテルをはりつけてもつとも先進的な部分の弾圧をもくろみ、米帝をはじめとするブルジョアジーどもは「社会主義のもとでは自由もパンも与えられない」と宣伝して、人民の社会主義からの離反と資本主義への永遠の隸属をもくろんでいる。全世界の人民はこれを許さず、同時にポーランド人民のたたかいをもっぱら反ソ連社帝の要素のみ着目して評価する部分（中国派など）、あるいはその意義を反官僚闘争に限定し歪曲する部分（トロツキズム）と分歧しつつ、「連帶」を一里塚として開始されたポーランドの社会主義の再生をかけた權力闘争を全力を

げて防衛せねばならない。

第二世界諸国

第三は、第三世界諸国における反帝民族解放闘争の前進、政治的激動の開始である。世界資本主義の危機、帝国主義の新植民地支配の強化は、これらの国々の政治的経済的矛盾を激成している。こんにちアジア・アフリカ・ラテンアメリカの第三世界諸国では約八億にものぼる人々が慢性的飢餓状態にさらされている。その主要な社会的要因は帝国主義による経済支配・資源略奪・農業破壊にある。また韓国、ブラジルなどいわゆる「中進国」と称される国々では、外資導入・輸出主導による高度経済成長を外見上は実現したかにみえたが、石油危機を引き金にして急速に経済破綻におちいり、帝国主義への従属性はますます深まっている。中東産油国においては、たしかに巨額のオイルドラーが蓄積されたが、多くのばあいそれはごく少数の支配者の手に独占され、国内の貧富の差が拡大したばかりでなく、オイルドラーの八割強は帝国主義多国籍企業のもとに還流された。このようないくつかの状況を背景にして各国の階級矛盾は激化し、反帝民族解放運動は大きな前進をとげ、七〇年代後半にはパーレビ（イラン）、朴（韓国）、ソモサ（ニカラグア）の独裁体制があいついで崩壊するという事態が現出したのである。昨八年情勢もまたこれをひきついだ。その典型をわれわれはイラン、エジプト、そして南朝鮮、エルサルバドルのなかに見出すことができる。

イランでは昨八年六月二二日の大統領バニサドルの追放、つづく二八日のイスラム共和国（ＩＲＰ）本部爆破によって、激烈な階級的分解と抗争が開始された。モジャヘディン・ハルク（人民戦士団）を筆頭とする反ホメイニ勢力は、その後も首相府爆破（八月三〇日）、検察庁ビル爆破（九月五日）などを決行し、イランはなれば内戦状態に突入した。ホメイニ体制はこの報復として、六月から八月にかけて千人近くの左翼勢力を大量処刑したといわれている。反米反パーレビをかかげて勝利をおさめた七年二月革命は、イラン革命の終結ではなく、そのはじまりにすぎなかつたことがますます明らかになった。イラン二月革命はその当初から内部に、イスラム僧侶階級、民族ブルジョアジー、および産業労働者・貧農・知識人とのあいだの階級的対立をはらむものであった。ＩＲＰ結成以降、二月革命の成果はイスラム共和国の樹立を唱える僧侶階層によってさん奪され、革命の發展はおさえつけられ、宗教的ベールをまとつたＩＲＰ独裁支配が人民の頭上に君臨した。しかし二月革命の眞の主体であった都市下層労働者、石油産業労働者、貧農などの労農大衆は、ＩＲＰの独裁政治、土地革命の不徹底、少数民族への弾圧と好転せぬ経済危機のなか

で、急速にＩＲＰから離反はじめた。他方、次の階級激突の到来を予測して二月革命以降も独自の武装を解除しなかった諸革命組織は、人民の反政府的気運、不満とむすびつきながら、労働者農民の組織化を攻勢的におこす始めた。そしてバニサドル追放を機に、いまだ強固な基盤をもたない民族ブルジョアジーの一部との統一戦線を形成し、六月以降ＩＲＰ支配体制への攻勢を開始したのである。伊朗労農人民のもとも前衛的な部分のうちか張する部分も生みだされている。イランにおけるこのような新しい事態は、イスラム主義の呪縛のもとに中東諸国の民族解放闘争の革命的発展に、必ずや巨大な影響をおよぼさずにはおかないのである。

中東では昨八年、もうひとつの大きな事件が発生した。十月六日のエジプト大統領サダト射殺事件である。軍事パレードのさいちゅう、軍人をふくむいわゆる「イスラム原理主義者」によってなされたサダトの銃殺は、エジプトにおける階級矛盾の爆発であった。

七〇年にナセルの跡目をついで政権の座についたサダトは、汎アラブ主義と民族経済基礎の強化をかかげたナセル路線からの脱却の道を歩み、反ソ親米、脱アラブ、外資導入による「開放経済」の政策をうちだし、七八年米・エジプト・イスラエル三者によるキャンプデービットの合意、七九年エジプト・イスラエル和平条約の調印という、中東における米帝の私兵としての役割りをはたしてきた。サダト政権のもとでエジプト経済は対米従属性をつよめ、ひとにぎりの新興民族ブルジョアジーを富ませたかわりに、労働者・農民の経済的困窮を急速度にすすめた。八〇年にはインフレ率は三〇%、失業率は二〇%にも達した。さらにサダトは、とりわけ対イスラエル和平条約締結以降ふきだした人民の政治的反抗をおさえつけるために、反政府勢力への大弾圧を開始しはじめた。八一年九月には一五〇〇人以上の反サダト分子が一斉逮捕され、反体制的とみなされた新聞・雑誌は発行禁止処分をうけた。そしてこうした情勢のなかでついに十・六サダト射殺事件が生じしたのである。サダトはパーレビや朴と同じ運命をたどった。サダトの死は、第三世界のカライドン政権が抱えこんだ政治危機の深さをさまざまとしめした。

南朝鮮では八〇年五月光州蜂起をうけつぶたたかいが、八年をつらぬいて持続・拡大した。光州蜂起一周年の五月闘争の高揚にひきつづき、秋にはふたたび学生運動を先頭にしてたたかいがいっせいに噴出した。九月以来、全国の大學生で①全斗煥ファシズム体制の打倒②学園民主化③労働者・農民の権利保障④屈辱外交反対⑤オリエンピック誘致反対などのスローガンを共通にかかげて集会やデモが

うちぬかれた。十月二三日のソウル大生一五〇〇件の決起時には、機動隊への投石戦、角材や鉄パイプを手にしての武装闘争が激しく展開された。そして延世大やソウル大のデモのさいには「ヤンキー・ゴーホーム」という、かつてみられない反米スローガンが公然と呼ばれるにいたっている。また労働運動においても、労働争議数は八〇年一年間で一八〇〇件および（韓国社会党発表）、八一年にも官製の統計ですら八月末現在一〇四件を記録し（労働部発表）、七〇年代の年平均発生件数約一〇〇件を大きくうわまわるという高揚が現出している。

これらの運動は総体として、七〇年代の民主化闘争の地平をこえて、反帝闘争としての民族解放闘争の勝利が「自然発生的蜂起」を「革命戦争」に転化しうる「軍隊と中央当局の組織化」ぬきにはりえないことをきっぱりと断言した。「白書」の提起するものはたんなる理念ではない。それは破局的経済的危機と対日対米隸属化のいっそうの進行を背景にして、不可避に高まりゆく南朝鮮人民のたたかいの現実のなかで日々問われつづけているのである。

中南米・エルサルバドルでは、七九年のニカラグア革命の勝利をうけて、米帝に擁立された軍事政権にたいする人民の内戦が、まさに国土を二分してたたかいぬかれている。八一年一月、ファラブンド・マルチ民族解放戦線（FMLN）—四つの政治軍事組織により八〇年十月に結成された）を主力とした部隊は、首都サンサルバドルと周辺部で全面的な攻勢を開始した。農村部のゲリラ戦に呼応して都市部では労働者がゼネストに突入した。そしてつづく五月と八月の戦闘ののち、解放戦線勢力は八月一五日、東部モラサン県に臨時革命政府を樹立した。

エルサルバドルの内戦は、かつてのニカラグアがそうであったように、アメリカ多国籍企業と結託した「十四家族」と呼ばれる買弁ブルジョアジーと、国民の圧倒的多数をしめる農民・労働者との階級戦争である。そしてそれはこんにちのラテンアメリカ諸国における共通する政治情況を、先鋭的に表現するものにほかならない。

中国共産党路線の破産

以上概観した武装闘争や内戦をともなって大きくなる国際階級闘争の激発を前にして、かつて国際階級闘争にたいする一定の積極的影響力を有してきた中国共産党の路線的破産はますます顕著なものとなってきた。

「四人組」を追放して実権を握った現中国

烽火

指導部は「毛沢東批判」「左翼的偏向の是正」をつうじて、國際路線における反ソ反霸權路線、國內路線における「四つの現代化」路線をますます純化させている。これを中国共産黨の右翼的歴史総括をもって合理化し、集大成したものが八一年六月二七日の第十一期中央委員会第六回総会で採択された「建国いらの党的若干の歴史的問題についての決議」であった。ここにおいて中国の歴史はもっぱら次の見地、すなわち「社会主義的改造（生産手段の共有制、労働に応じた分配の実現）が基本的なしとげられてのち、わが国が解決しなければならない主要な矛盾は、人民の日ましに増大する物質的文化的欲望と立ち遅れた社会的生産との矛盾である」「党的各分野の活動はすべて経済建設という中心に従属性し、これに奉仕しなければならない」という立場から総括され、四九年建国から六年までを肯定的に総括し、文化大革命が開始された六年から七年の十年間を「最大の挫折と損失をこうむった」時期として否定的に描きだす鄧小平史觀によって「最終的評価」が下された。

これと軌を一にして中国共産黨の「三つの世界論」にしめされた國際路線は、ますますその致命的弱点を全面発露するにいたつている。七〇年代初頭以降、中国共産黨の國際路線の理論的基礎をなした「三つの世界論」はソ連社会帝国主義との闘争という優れた実践的契機に媒介されながらも、その原点において、現代世界の本質的矛盾をプロレタリアートとブルジョアジーとの階級対立にではなく第三世界（発展途上国）と第一世界（超大国）のあいだの矛盾にもとめる誤まり、そして帝国主義の存在を「好戦的なソ連社帝」と米帝の二国に限定する誤まり、さらにその結果第二世界（西欧帝・日帝など）を第三世界の同盟軍と規定し、第三世界の革命を民族民主主義革命に固定化するという誤りなどを内包するものであった。総じて「三つの世界論」は國際階級闘争を世界革命にむけて統合していく路線たりえず、むしろそれを「反権力」、「反反権力」増強を第一義とし、ソ連社帝の圧力から中国の安全を守るという点に最大の重点をおいて主張されることによって、國際階級闘争への影響力をますます喪失してしまっている。

他方、國內路線の面では、中ソ論争の大きな争点であった「プロレタリア独裁下で階級闘争は存在するか否か」という問題に關して現中国指導部は、社会主義の条件のもとではブルジョア階級が発生する政治的経済的基礎はないと独断したうえで、「プロ独下の継続革命」をめざした文革を「マルクス・レーニン主義のドグマ化」「大きな災難をもたらし

世界資本主義の政治的経済的危機は、日帝の中核部をとらえはじめ、また国際階級闘争のうねりは五五年体制下の日本階級闘争の構造をその基礎から搖るがせている。五五年体制とは、胎頭するアジア民族解放闘争の大波から日本階級闘争を切りはなし、他帝に例をみない国内労働者人民の強搾取強収奪とアジア人民からの収奪を基盤に、プロレタリアートの一部の層を買収することによって成立した階級支配の構造であつた。この支配構造がいま崩壊しつつある。日帝ブルジョアジーはみずから危機をアジア・太平洋圏への侵略を桎梏とし、大胆な再編成に着手した。戦争への国民の排外主義的大動員をなしきることにこそ彼らの人民にたいする諸攻撃の統合環は存在している。労働運動の帝国主義的再編、労働運動の産業報国会化攻撃は、この要に位置し、その総仕上げをもくろんでうちおろされる一大政治攻撃にほかならない。他方、プロレタリアート人民の側も、おしよせたる生活苦、戦争への危機感を背景にして広範な反撃を開始しつつあり、またその解決の方針をめぐって政治的分解を開始しつつある。われわれの政治的組織的陣型を整えなければ、わが国においても帝国主義の危機を革命的危機へ転化すべき一時代がはじまろうとしている。ブルジョアジーとの階級攻防戦の勝利にむけて、労働戦線でのたたかいを基礎に、

路線を導入した。文革をこのように総括し清算してしまったことは正しくない。毛沢東は革命後の中国が「ブルジョアジーのいないブルジョア国家」であり、このような国でのプロレタリア独裁の任務の要は、資本主義を復活させる諸条件との闘争を、新しいかたちでの階級闘争として組織することにあるとして文革を提起した。それは断固として右派の中傷から擁護されねばならない。毛沢東が批判されるべき点は、継続革命を「自力更生」という一国主義的限界のなかで主張することによって、中国プロ独を世界プロ独に発展させていく回路をみずからとざしてしまった点にある。この毛沢東の限界にも規定されて国内経済建設の遅滞への批判をバネにして、中国革命の発展の本質的原動力を階級闘争にではなく、生産力にもとめ、中国という一民族国家の防衛にのみ腐心し、いわば革命の停止を要求する現右派指導部が生みだされたのである。

一、産報化を軸に進む国内再編

ならない。

戦争への国民动员

侵略反革命戦争とこれを支えるファシズムの準備をおしすすめんとする日帝は、こんなち次のような攻撃をもつてプロレタリアート人民においかかっている。

トの一部の層を買収することによって成立した階級支配の構造であった。この支配構造がいま崩壊しつつある。日帝ブルジョアジーはみずから危機をアジア・太平洋圏への侵略反革命によって突破すべく、旧来の支配構造を桎梏とし、大胆な再編成に着手した。戦争への国民の排外主義的大動員をなしきることここにこそ彼らの人民にたいする諸攻撃の統合環は存在している。労働運動の帝国主義的再編、労働運動の産業報国会化攻撃は、この要に位置し、その総仕上げをもくろんでうちおろされる一大政治攻撃にはかならない。他方、プロレタリアート人民の側も、おしよせる生活苦、戦争への危機感を背景にして広範な反撃を開始しつつあり、またその解決の方針をめぐって政治的の分解を開始しつつある。

書」にみられる愛国心の扇動を軍事的觀点からも開始しはじめているのである。

書」にみられる愛国心の扇動を軍事的觀点からも開始しはじめているのである。

国家統制の強化と愛国国防教育の徹底化②靖国神社への全閣僚参拝の恒常化や天皇の沖縄上陸策動など天皇制・天皇制イデオロギーの強化③部落差別、「障害者」差別、女性差別など差別分断支配の強化④在日朝鮮人運動への弾圧、入管法改悪をテコとした在日アジア人民への差別・分断・抑圧・追放の強化⑤刑法改悪―保安処分新設など治安弾圧体制の強化⑥沖縄軍用地強制使用、三里塚二期着工攻撃にみられる人民闘争への弾圧・鎮静化。そしてこれら集大成として改憲が準備されているのである。すでに自民党憲法調査会においては、天皇元首化、第九条と基本的人権条例の撤廃、非常戒厳令などをもつて改憲草案づくりが進行し、それは「中道政党」のとりこみを経て、八三年総選挙での改憲の確保としてスケジュール化されている。このもとで昨十月の「日本を守る国民會議」の結成にみられるごとく、自主憲法制定・愛国国防をかかげたファシズム社会運動が活性化しあげている。

第三の柱は、革命党破壊と政党再編の攻撃である。日帝はその延命をかけた諸攻撃が、当然のことながら多くの労働者人民との衝突をひきおこし、支配の危機を不可避に生み出すであろうことをみこして、次の二つの攻撃を全面化している。一つは人民内部の先進的層への集中攻撃をくわえること、とりわけ革命党への徹底的弾圧によって階級闘争の爆発とその革命的發展を事前に封じることである。二つはブルジョア独裁を「中道政党」をまきこんで補強し、必要とあればいつでも新たなブルジョア政党を結成できる準備を整えておくことである。革命的諸組織への破防法的弾圧体制の強化や、民社・公明などの反革命的純化という最近の一連の諸動向は、はつきりとそのことを物語っている。

以上三点にしめした日帝の攻撃は、進行する労働戦線の右翼的統一、労働運動の産業報国会化の攻撃とその最深部において固く結びつき、總体として労働者人民を戦争とファシズムの道へひきずりこもうとするものであることを、われわれは再確認しておかねばならない。

こんにち右翼的労戦統一をめぐる攻防は、日本階級闘争の最大の階級攻防の焦点として存在している。「内外の変動に対応していくために労働運動は新しい視点に立脚し、政策的にも理念的にも古い殻を打破しなければならない」とする統一準備会の基調となつた「基本構想」は、先にのべた日帝の攻撃に労働運動の側から呼応するものとしてある。総評の解体と糾合を当面の主目的とするがゆえに、まだ抽象的な表現をとるこの「基本構想」の本音と行きつく先は、「労戦統一」を

総評の破産と屈服

こんにち右翼的労戦統一をめぐる攻防は、日本階級闘争の最大の階級攻防の焦点として存在している。「内外の変動に対応していくために労働運動は新しい視点に立脚し、政策的にも理念的にも古い殻を打破しなければならない」とする統一準備会の基調となつた「基本構想」は、先にのべた日帝の攻撃に労働運動の側から呼応するものとしてある。総評の解体と糾合を当面の主目的とするがゆえに、まだ抽象的な表現をとるこの「基本構想」の本音と行きつく先は、「労戦統一」を

主導する同盟の八二年議案書のなかに一点のくよりもなくあらわされている。同盟はここにおいて、従来の「労使協調」の旗印にくわえ、それとどまらず「(日本の)西側の一員としての役割分担」の必要性をうたい、「安保堅持・自衛力の整備増強」を鮮明にかかげた。戦争時を除いて「軍備増強」を提唱した労働運動は前代未聞である。そしてまた「南北問題の解決」「経済協力の拡充」などと鈴木の所信表明かと疑うばかりの主張をなし、「労働外交」という名目のもとに日帝のアジアにおける新植民地支配の強化にたいする協力を誓い、アジア人民の労働運動と階級闘争を抑壓する尖兵として登場せんとしている。彼らの旗印であった「資本主義の改良」さえも後景化したこれらの立場のうちだしては、彼ら労働手代とその主人である資本の危機のあらわれであると同時に、この危機を反革命的に乘じきつていこうとする決意のあらわれである。この同盟路線の前に、総評民同は屈服し反共・労資協調・資本主義擁護をかかげる帝国主義的労働運動の軍門に下った。戦後の高度経済成長と帝國主義の相対的安定を經濟的政治的基盤として存立可能であった総評労働運動は、ついにその物質的基盤の喪失とともに最後的崩壊に突入したのである。同時にわれわれは、物質的基盤の崩壊によるにどまらず、また敵の攻撃によるにどまらず、総評民同による労働運動「指導」が、こんにちの総評のゆきづまりと帝國主義労働運動への屈服をもたらしたものであることを鮮明にしておかねばならない。

GHQの意向をうけて結成された総評は、当初「北朝鮮の侵略反対、国連軍・米軍支持」をかかげて出発したが、朝鮮戦争下の人民の激しい反戦闘争の嵐のなかで「ニワトリからアヒル」への転化をとげた。以降総評は反基督教闘争をはじめ、生産現場を中心地域的な大衆的闘争を組織していく。他方、朝鮮特需によって息を吹きかえした日帝は、世界的な貿易拡大のなかで本格的な独占資本主義としての確立と、これにみあう新たな労働者支配にのりだした。高野にかわって登場した民主指導部、太田一岩井ラインは、独占の復活と高度経済成長の開始に乗じて「賃金闘争―春闘方式」を中心とした合理化と引きかえの賃上げを獲得する大企業本工労働者中心の物とり路線を開花させた。しかしその路線の必然的結果として、生産性向上運動への屈服、「労使協調による賃上げ」論への屈服とともに、生産現場での資本の一元的支持を許し、現場大衆闘争と大衆的政治闘争を放棄することとなつた。これに抗して六〇年代末、ベトナム反戦闘争の高揚と結合して青年労働者たちを中心とした階級的労働運動の構築のたたかいが開始された。彼らの手によって職場実力闘争が活性化し、労働運動が全人民政治闘争と結びつき、プロレタリ

三〇年代と産報化

労戦統一問題をめぐり、日本労働運動はいま戦後二度目の歴史的な流動と分解の局面をむかえている。それは狭く「労働戦線」という一戦場での動向にとどまるものではけつてしまない。労働運動が階級闘争のもつとも広範で基礎的な戦場であるがゆえに、開始された流動と分解を誰がどこに導き統合していくのかという問題は、今後の日本階級闘争の勝敗を決する問題となることは必至である。われわれはこの攻防戦に勝利しなければならない。日本階級闘争は過去数度、このたたかいにおいて敗北を経験している。一九三〇年代の敗北はその最大のものであつた。

世界大恐慌をへて、ますますし烈化する帝國主義間強盗的抗争のなかで日帝は、朝鮮、台湾につづく中国への侵略によって危機から脱出をはからんと一五年侵略戦争を開始した。そしてこの侵略戦争のなかに、おりから世界恐慌による人民の生活の壊滅的状況の突破を誘導していったのである。このとき日本共産党は非法下での集中的弾圧を浴び、大衆の眼前から姿を消していた。これを前提として國家権力は合法無産政党を国家社会主義のもとに收約した。国家社会主義者たちは「満蒙の権益を資本家の手にではなく困窮せる労農人民の手に」と主張した。戦前の「労戦統一」はまったくこの政党再編と軌を一にしたものであり、労働運動はその後の戦闘のなかで三七年の総同盟の「ストライキ絶滅宣言」へいたり、そして四〇年の「大日本産業報国会」へといきつくな。

われわれはこの敗北の歴史のなかから、現在の「労戦統一」もまた戦前の産業報国会へ

いたる過程と同様の道を歩んでいること、労働者人民を戦争とファシズムに動員するための総仕上げとしての位置をもつていることを読みとらねばならない。同時に戦前の産業報国会化攻撃が勝利をおさめた前提として、これにいたる事前の段階で國家権力が共産主義者（党）を人民のなかから追放し、労働者大衆が革命党とむすびつく回路をあらかじめ切斷することに成功したこと、すなわち革命党

の不在を今日的な問題として総括し教訓化せねばならない。この点を不問にした歴史総括はすべてまやかしである。
われわれは次章以下、こんにち労戦の右再編とたかわんとする者が、この階級攻防に勝利するため、どのような階級的分岐を組織し、どのような党をつくりあげるべきなのかという問題にふれていきたい。

右翼日和見主義、解党主義にたいする第二の批判点は、帝国主義的労戦統一をもつてうちおろされる侵略反革命戦争、ファシズム、産業報国会化攻撃との闘争、その本格的準備を労働組合の自然成長的武装、労働組合の国家権力との自然発生的対応の延長に指定していることである。

十二・一四統一準備会発足を頂点にした帝國主義的労働戦線統一—帝国主義的ナショナルセンター構築の動きにたいして、全国民的な流動が始まり、すべての良心的プロレタリアートが、その単産、部署を問わず反撃にたちあがつた。

「基本構想」にしめされるように、今回の労戦統一は戦後において幾度か試みられてきたそれとは大きく性格が異なっている。戦後相対的安定期の崩壊にともなう帝国主義間市場争奪戦の激化、日帝の戦後史を画する侵略反革命戦争の本格的準備、ファシズム統治形態の準備、これらのもとでの戦後労働運動を代表してきた総評の最終的破産、まさにブルジョアジーはこの機をとらえて、一きょにわが国階級闘争の構造そのものを一変させてしまおうとしているのだ。敵の攻撃はついにここまできた。

こうした戦後における重大な階級攻防戦にさして、総評II横枝・富塚指導部は、恥ずべき歴史的屈服に奔走し、総評は不可避の分裂と解体の過程に入りした。一二・一四統一準備会には、総評民間単産は五単産が結集しただけとはいえ、すでに一二・七総評拡大評議会で「基本構想ナフナ上げ、門戸開放を条件に民間単産が準備会参加」を決定している。今春期の過程で総評民間主軸単産の参加が予測され、他方で行政改革攻撃とあわせて官公労の解体が進行するであろうことを予測される。総評内左派にとって、屈服の道を歩むのか、当然にも直面する組織破壊に真向からの抵抗戦をいどむのか、これ以外の選択はない。日共II統一労組懇は、何ら有効な抵抗戦を組織することなく、統一労組懇系の新ナショナルセンター構築をもつて階級的労働運動への敵対者としての姿を公然化させるであろう。こうした日共にかわって、総評内左派をも含む左派反対派総体をも糾合しきるたたかいを、われわれは準備しなければならない。その時、現に総評内左派が依拠している「五項目補強見解—三顧問声明支持」ではいさかもこの抵抗戦をたたかぬことはできない。なぜならば「五項目補強見解をもつて統一対処を！」という考えは、すでに分裂を開始し

二、労働運動の再建と前衛党

破産した総評労働運動の「統一」と「労働戦線全体へのヘゲモニー回復」を願望することになり、結局それは帝国主義的労戦統一への合流の道となるからである。敵の側からの分裂攻撃にたいして良心的プロレタリアートのとるべき道は、敵のなすがままにまかせることなくこの流動を鮮明な階級的分岐へと組織していくことである。

現下の流動を八〇年代をつらぬく階級的分岐にまで組織せんとするわれわれにとって、三〇年代プロレタリアートの敗北、六〇年代階級的労働運動の一たんの敗北こそ突破しなければならない。そして帝国主義的労戦統一をめぐる二つの部分にたいして、先進的プロレタリアートは自己を峻別し、大衆を十重二十重に自己のまわりに結集させねばならない。

ひとつは闘争の内部にひそむ右翼日和見主義解党主義であり、いまひとつは社会帝国主義である。

「総評守れ」は敗北の道

攻防内部における右翼日和見主義、解党主義は、現下の流動を「総評内分岐」へと閑殺し、この攻防戦にかかるプロレタリア階級の立場を「戦後日本型戦闘的組合主義の再生」「総評守れ運動」に閉殺してしまう部分である。

彼らは、かつての日本型戦闘的組合主義が、日帝の復興期、高度経済成長と帝国主義の経済的安定期といふ経済的政治的条件に規定された経済主義であり、組合主義であることを無条件に賛美する部分である。さらにこんにちでは、その経済的、政治的条件が歴史的に喪失され、かわって帝国主義間争奪戦、帝国主義の危機がわれわれの踏まえるべき経済的政治的条件であることを無視しようとしている部分である。かつての総評主義—その外的戦闘性が、帝国主義の超過利潤のプロレタリア上層への配分を期待しての経済主義的戦闘性であったにすぎないこと。下層労働者と被抑圧民族の犠牲のうえで、生産に協力する代償としてブルジョアジーから何らかの経済的譲歩を期待するものであつたこと。および

まったく同一の質でブルジョア国家権力から何らかの政治的譲歩を期待する組合主義的政合潮流、さらには歴史的な第二組合（同盟）さえも、この戦後の経済主義組合主義の内部から必然的に成長してきたものであり、その戦闘性の外皮の下の共通の階級的性格こそが、いま打倒されねばならないのである。

右翼日和見主義、解党主義にたいする第二の批判点は、帝國主義的労戦統一をもつてうちおろされる侵略反革命戦争、ファシズム、産業報国会化攻撃との闘争、その本格的準備を労働組合の自然成長的武装、労働組合の国家権力との自然発生的対応の延長に指定していることである。

われわれはここに彼らの二重の意味での敗北を見ることができる。それは現下の流動にさしてプロレタリアートのうちこむ組織的武器一方における階級内分裂、階級分岐を組織し、階級的部分を他の動搖する部分から銳く峻別するクサビ、他方における左派反対派総体をも糾合する統一戦線のクサビの前によこたわる阻害物である。彼らは大衆の団結の必要性の確信を利用し、統一戦線構築のためにこそ必要な階級的部分の他の動搖する部分からの自己峻別を非難する。それは労働運動と共産主義を銳く分離させ、党建設と階級形成を銳く分離させ、結局はこの流動のなかで眞のレーニン主義前衛党を建設していくことを否定しようとする解党主義である。そして注意しなければならないのは、この解党主義はかならず他方での階級的統一戦線のストライガント行動綱領に関して、これを明らかにしないがゆえに大衆を糾合するうえで、最も動搖する部分として登場するであろうことである。

右翼日和見主義、解党主義にたいする批判の第三の点は、自然発生的労働運動にたいする批判実践、目的意識的実践として階級的労働運動を構築することを放棄し、労働組合の建設とその指導を、「労働組合II階級の第一次団結体」「労働組合指導II革命の学校、共産主義の学校」として確立することを放棄し、ブルジョアジー、国家権力、労働手代たちの包囲攻撃に有効な反撃をなしえないということである。

労働運動の基本的性格は自然発生的である。それは資本主義とブルジョアジーの収奪、抑圧にたいするプロレタリア階級の反抗である。それはプロレタリアートの生きがため食わんがための不可避に生じる階級闘争である。それはマルクス主義の登場をもつて発生したものではなく、資本主義的残存の存在するかぎり、たとえ一国あるいは数国の労働者権力下であつても自然発生するものである。自然発生的労働運動は、まずもつて個別資本への経済要求から成長し、その自然成長上に政府にたいする経済要求を自己の手に握る。みず

からの生きんがため食わんがための団結を労働組合として実現しようとする。その団結は、個別資本別、工場別団結から成長し、そのまま成長上に産業別団結の要求を自己の手に握る。

この自然発生的労働運動の質は、容易にブルジョアジー、國家権力、そして労働手代達によって変形させられる。わが国にあっては、まず歴史的には、熟練工の引き抜き防止、終身束縛の必要上あみだされた「年功序列型賃金・終身雇用制」(一九一五年以降)と上層(熟練、基幹産業従業員)労働者と下層労働者への分断支配、およびその帰結としての企業内組合に典型的である。戦後においては日本ブルジョアジーとG.H.Qの労働組合支配の要として育成された民同(労働組合民主化同盟)による産別会議の破壊、そしてすでにふれた日本型戦闘的組合主義の最大の負の遺産——労働者の政治闘争、民主主義闘争、はじめて階級闘争を労働組合のワク内、統制内に束縛する組合主義である。もちろんのこと、戦前の「大日本産業報国会」そして現在の産報化は言うまでもないところである。

そしてさらに社民が、たとえ『階級内社民』であつたとしても、帝国主義の危機にさいして自國帝国主義の擁護者となり、労働手代となるのが不可避であり、自然発生的労働運動の即時的要求をさかてとり、社会排外主義へと歪曲するための橋わたしとなる危険性を本質上有していることが指摘される。その根拠は、社民の『資本主義批判』と『社会主義』そのものの非プロレタリア性に帰因する。彼らにとっての『社会主義革命』とは、企業利潤のわけ前の不平等を本的に不平等な(彼らにとって他民族は論外として)国内人民に平等を規準として分配することにつきるのである。すなわち問題は生産力の増強であり生産性の向上である。具体的には、他民族をいかに収奪したとしても、人民をいかに収奪したとしても、競争者を打倒し生き残り、独占した繁栄をともにあさることなのだ。

総じて右翼日和見主義、解党主義はプロレタリアートの階級的労働運動路線を自然発生的労働運動の外的な戦闘性に解消してしまおうとする。先進的プロレタリアートはみずから階級的労働運動路線を彼らのそれとはつきり区別すべきである。われわれのそれは六〇年代後半における階級的労働運動を、その根本的弱点を批判、総括し、レーニン主義前衛党建設を要に継承、発展させていこうとするものであり、彼らはこのわが國労働運動の意識的地平そのものからの転落としてある。

階級的労働運動の再建

われわれが現下の流動のなかから階級的労働運動を再構築せんとするさいに、突破しなければならない六〇年代後半階級的労働運動

からの生きんがため食わんがための団結を労働組合として実現しようとする。その団結は、個別資本別、工場別団結から成長し、そのまま成長上に産業別団結の要求を自己の手に握る。

の総括とはなしに。

われわれのかつての階級的労働運動路線を規定している第一の点は、それが六五年を期して開始された主として関西における革命的プロレタリアートたちの労研内左派反対派→職場反戦青年委員会の組織化→組合内ヘゲモニーの掌握→大衆的実力闘争の組織化と全人民的政治闘争への決起→地区反戦の組織化→地区党の結成→労働者軍事組織の結成、街頭武装闘争、反レッドパートジ闘争→中央権力闘争と地区マッセンストライキへの決起という数年間にわたる実践、その英雄的ではあったが自然成長的な闘いを直接的に対象化しようとしたものであつたという点である。

第二の点。階級的労働運動路線は、まず社民の『資本家階級打倒の闘い』が日ましに右傾化する実際上の根拠を、社民の政治的力量が全的に依拠する労働組合の力量の弱化にもとめ、組合主義的政治闘争の破産を宣告する。さらに自己の第一次ブント「労研、社研」路線の総括をも含め、諸党派の労働運動路線を「組合的團結の徹底した強化の延長上に階級的團結を形成せんとするもの」なる組合主義として批判した。そしてベトナム反戦闘争の大衆的昂揚を条件として、反帝国主義を中心スローガンに反帝統一戦線の形成とその領導をもつて労働組合と社民ヘゲモニーにかわる階級形成とそのヘゲモニーとすべきこと。実践的には全学連と職場反戦を地区反戦に統合再編し、もつて反帝統一戦線の中心組織とし、その内部において「コミュニケーション運動の質と原則」が形成されること。このコミュニケーション運動はまた、反帝統一戦線と結合することをもつて「全人民的團結の質」へと強化されること。かくして反帝統一戦線のもと「コミュニケーション戦士」は「戦闘集団」「組織者集団」として「組織された暴力」として自らを形成し、あらゆる被抑圧階級層のたたかいと交流し、もつて自己の運動を「政治的軍事的組織的訓練の実地教育の学校」たらしめるというものであった。このような「反帝統一戦線の力量と結合した新しい労働運動」を階級的労働運動であるとしたのである。

第三に、全体として階級的労働運動路線は労働運動を経済闘争と労働組合に閉鎖する経済主義、組合主義とたたかい、労働組合運動から解き放ち、さらにプロレタリアートの政治的決起を組合主義的政治闘争から解き放つことを高らかに宣言した。いまや階級的労働運動は直面するプロレタリアートの革命的決起へむけ、自己を政治的、軍事的組織的に武装することへとその実践の基軸をおし広げ高めようとした。

以上の六〇年代後半期、階級的労働運動路線の到達した地平をふまえ、階級的労働運動の再構築にむかわんとするさいになにが総括されるべきなのか。

社帝＝日共の敵対性

右翼的労戦統一にたいする人民の流動が開始されるなかで、社会帝国主義＝日共・統一労組想による「階級的民主的ナショナルセンター確立」なる「独自」の労戦再編の動きが進んでいる。彼らは「左派」を自負している。しかしわれわれは、彼らの総評内における見せかけの「左派」的装いは、彼らが総評をわざいっそう完璧にひきはがされ、同時に彼らがむきだしの階級的労働運動にたいする真正面からの敵対者として登場するであろうことを知っている。

先進的プロレタリアートは彼らにいさかかの幻想を持つてはならない。そして現在の総評労働運動の分裂と解体を最大焦点とした労戦統一をめぐる流動のなかから、日共＝統一労組想と自己を峻別し、直面する侵略反革命戦争、ファシズム、産報攻撃にたいして、三〇年代プロレタリアートの敗北を突破するたたかいを準備しなければならない。

「再編」は誤っているのか。この点を彼らの主張にそつてあきらかにしておく必要がある。

第一に、彼らは「基本構想」が戦後労働運動ではかつてなかった「軍備増強路線」をとったことを批判し、これを「現代版の産業報国会」であると批判している。この限りではわれわれもそう考える。しかしこの点は先進的大衆自身がすでに到達している自然発生的意識であり批判である。問題は彼らが、この大衆の反戦平和意識にもとづく右翼的労戦統一にたいする批判を、発展と変革の方向にではなく、「右翼的潮流＝公民路線との闘争」

なる現状防衛的、議会主義的方向へとねじまげ、反階級的に集約してしまおうとしていることである。

日共は帝国主義戦争とファシズムの前にはガレキと化す以外にはない「改良政府」の中間連合政権構想そのものが破産している。彼らは破産した社民、いや社民の不可避的な転落にたいして、ブルジョア民主主義の社民にかわる防波堤の役割をひきうけ、プロレタリアートのたたかいをブルジョア民主主義的幻惑のなかに解体しようとしている。

日共はこんにち、その「資本主義批判」と社会主義」の内実を、ますます急速にカウツキー主義の社民路線へと固着させてしまっている。このかんの「資本論の今日的意義」に関する一連の彼らの論文は、そのことをしめしている。彼らは資本主義の進歩性一般を承認し、資本主義の没落の法則的不可避性を主張し、これをもってプロレタリアートの革命的実践にとってかえんとするカウツキー主義である。

彼らは資本主義の原則的批判を、賃労働と資本との非和解的対立—賃金奴隸の自己解放にもとめることを拒否し、資本による賃労働の搾取批判—分配の平等・生産力の増強へと帰結させ、他方、能力に応じて働き必要に応じて得る無階級社会と無償労働に労働者の社会建設の規準を定めることを拒否して、レンニンが批判してやまなかつた「自由で平等な全人類国家」にこれを転落させている。

したがつて日共は、その実践路線においてますます民族主義、排外主義の「左」からの鼓吹者としてたちあらわれている。たとえば一連の帝国主義者の重拡路線に対決すると称してうちだされた「平和綱領」なるものは、帝国主義国であり、抑圧民族に属する日本の「民族自決」擁護を公然と主張し、ここから国際階級闘争の再編を主張している。あるいは、より具体的には朝鮮問題に関する「主権侵害論」「日本を第二の韓国にするな」などのが外主義的扇動としてあらわれている。

第二に彼らは「総評の見直し」「労働戦線統一のための労働組合三原則」を提唱し、これもって「階級的民主的ナショナルセンターコンサル」を主張している。われわれもまた次の点を確信する。「総評主義」は批判されねばならず、前衛党による労働組合指導の原則が明確にされねばならず、また労働組合の全国的結合が促進されねばならないことを。

しかし彼ら日共の主張する「労働組合の民主化」とは、「労働組合の三原則」のうちの「資本からの独立」「政党からの独立」が「企業ぐるみ選挙」「選挙における特定政党支持」に反対することにのみに帰結するものであるように、結局は票田として労働組合を位

置づけ、集票のためにその「民主化」を主張するものであり、労働（組合）運動を資本と国家権力、労働手代たちから武装していくことには何らつながらるものである。

また彼らのいう「総評運動そのものの再検討」の内実は、たとえば中小未組織労働運動の分野においては「中小企業、下請企業の經營の安定そのものを、独占の民主的規制のたたかいと結合し、労働組合運動の職場、地域、産業別、さらには全国的な実践課題として位置づけること、この面で中小資本家、零細業者と共同の課題で協力、共闘できる労働組合への脱皮が総評にとって必要」と主張されているように、もはや「戦闘的組合主義」ではない。

したがつて彼ら日共は、帝国主義的労戦統一が不可避にもたらすであろう組織破壊、工場内暴力支配、奴隸制強化の攻撃にたいしてなんら有効な抵抗戦を組織しえず、プロレタリアートを武装することなく、逆に破産した社民路線をもって、より深く絶望的なまでにブルジョア改良の幻惑のなかにプロレタリアートを後退させ、いっさいの革命的運動と組織からプロレタリアートを切離してしまったのである。

以上、大きく二点にわけてみてきた先進国社帝日共への、現在の「労戦統一」をめぐる批判は、さらに三〇年代プロレタリアートの敗北を、主体的に総括し突破せんとするべき、いっそう鮮明なものとなる。

二〇年代敗北と前衛党

われわれは三〇年代プロレタリアートの敗北を総括することが、今後の侵略反革命戦争、ファシズム、産報化攻撃との正面戦にとつて、社帝日共の敵対とたたかうにあたつて、先進的プロレタリアートの武装のためにぜひ必要なと考へている。三〇年代プロレタリアートの敗北を、ドイツにおけるプロレタリアートの敗北を、とりわけファシズム前夜におけるスター・リン主義の敗北を基礎的にあつたつておこう。

二〇年代から三〇年代にかけてのドイツは、第一次帝国主義戦争での敗戦帝国主義としてぼう大な賠償をかかえ、主として社会民主党にひきいられたドイツプロレタリアートはその革命をワイマール共和制の樹立へと帰結させた。不断の国内政治体制の動搖と反動派の胎頭、さらに全世界的な経済危機の到来と相乗した国内経済の破局的様相、そしてヒットラー・ナチスリファシズムの全面的な胎頭のなかでドイツプロレタリアートは三〇年代をむかえた。このような情況下でスター・リン主義者に支配されていたドイツ共産党は、国会選挙得票数を大幅に拡大したが、しかし一九三三年一月の国会炎上事件を皮切りとした

第三に彼らは、三〇年代プロレタリアートの敗北と、社会民主がファシズムの到来にさいして民族主義へと自己を固着させてしまったことである。当時の共産党の選挙綱領は「民族解放と社会解放のために」と題されていたし、西欧にたいする戦争のためにソビエト連邦の援助を必要とする民族主義者をその内部に包みつした。

第三にドイツ共産党は、ファシズム社会運動との闘争のなかで、実践的にはますます民族主義へと自己を固着させてしまったことである。当時の共産党の選挙綱領は「民族解放と社会解放のために」と題されていたし、西欧にたいする戦争のためにソビエト連邦の援助を必要とする民族主義者をその内部に包みつした。

第四に、ワイマール共和制の破産のもとで、社会民主党がファシズムの到来にさいして有効な運動を組みえず、逆にブリューニング内閣リブルジョア反動派の補完勢力へと労働運動を帰結させてしまつたこととたたかいでございして共産党は、何ら有効な戦術をとりえず、「社会ファシズム」規定にもとづいて、「統一戦線は社民の裏切りを暴露するためのもの」として、実際の要求をめぐつて労働組合を分裂させ、ブルジョアジーとファシズムの団結のなかにプロレタリアートを追いやつてしまつた。社民の破産にたいして、革命の準備へと大衆を組織するのではなく、自己を社民の代弁者としてふたたびプロレタリアートをブルジョア改良主義の幻惑の内部に呪縛してしまつたのである。

こうしてドイツプロレタリアートは、ファシズムにたいして何らの抵抗もなしえないままに屈服した。しかしかれわれはさらに次の点をわすれてはならない。それはヒットラーがドイツで勝利して以降も、国際的に労働運動がファシズムにたいする抵抗を組織するところなく社民のチブル平和主義に支配されたこと。そしてドイツ共産党が幾千人もの党員をナチの強制収容所に囚われてからですら、「ドイツ共産党の敗北とか政治的死滅とかは駄弁にすぎない」「公然たるファシスト独裁の樹立は大衆のあいだに存在するすべての民主的幻想を打破し、彼らを社会民主主義の影響から解放することによって、ドイツのプロレタリア革命への発展速度をはやめるもの

である」と声明していたことである。彼らの直面した「地下運動」は、計画され準備された非合法活動、軍事活動ではなく、追いつめられた結果としての「地下運動」であり、組織と党員を弾圧に直接さらしてしまった。コミニンテルンの政策変更がなされたのも一九三四年以降のことであった。すでにドイツ共産党は壊滅させられており、コミニンテルンの政策変更は何ら敗北を根本総括するものではなかつた。一九三五年コミニンテルン七回大會の人民戦線路線は、もっぱらロシア対外政策上の変更（スターリンは孤立化を防ぐための西欧帝への同盟者として、それまでドイツとの統一戦線の形成に帰因するものである。したがつてコミニンテルンの「一八〇度の転換」は何ら革命的性格をもつものではなく、

四、正規の攻囲軍と三つの任務

以上のように現下の階級闘争の局面をみて、環が「労働運動の産報化とのたたかい」に存在することはだれもが認めざるをえないことである。したがって、われわれが本章で提起すべき任務、方針は、これをめぐる先進的プロレタリアートの任務に焦点づけねばならない。その時、われわれには、次の二つの党派的部 分との闘争が不可欠であることを前提的に確認しておかねばならない。

八年階級攻防の環

「運動」との闘争を唱えながらも、これを労働運動局面に限定した反撃でよしとする部分であり、第二には、それとは逆に現実の労働運動局面での攻防から逃亡し、プロレタリア本隊の階級形成戦から切断されたところでの「政治闘争」のみを主張する部分との闘争である。前者は、日本階級闘争史上、幾度にもわたって先進的プロレタリアート、革命的プロレタリアートのたたかいの前進のなかで、その反階級性を暴露され、階級闘争の前線から放逐されてきた経済主義者、右翼日和見主義者の輩であり、後者は、六〇年代後半の階級的労働運動の総括・教訓をレーニン主義的になしえない左翼小兒病者たちである。

すべての先進的プロレタリアートは、「労戦統一」をめぐる現下の階級攻防を、この二つの誤り双方とたたかうことと固く結びつけてたたかいぬかねばならない。だがそれは、単に政治闘争と経済闘争の結合一般や、労働組合運動指導と政治闘争指導の双方の重視一般を唱えるだけでは決定的に不足である。な

敗北を追認し、危機にさいしてのレーニン主義を否定し、ますますもってみずからを破産した社民の政治的代弁者へと転落させたものであった。彼らは国際的には、資本主義国家の防衛、軍備増強、愛國主義をとなえ、国内の党員までをも同盟者と規定し、「階級闘争のスローガンを「国民的和解」のスローガンにとつてかえた。フランス共産党は「フランス社会党との合同を考慮する」とまで称した。

人民戦線路線は国際プロレタリアートにとって、敵の侵略反革命戦争、ファシズム、産報化とたかうえでの有効な戦術ではありえず、否、むしろプロレタリアートを敗北と武装解除へと導く、帝国主義への全面屈服の路線であったと総括づけねばならない。

第一二三の任務

ぜなら、現下の階級攻防は、プロレタリアートの階級的不満が革命的要求に、また階級闘争が革命闘争に転化することを、ブルジョワジー国家権力が暴力をもって阻止し、弾圧しきる社会機構そのものを体系的に作り出そうとしている攻撃に、屈服するか否かを焦点としているからである。したがって、われわれはこれに抗し、プロレタリア大衆を領導し、プロレタリア階級の革命的暴力を組織して、みずから政治権力を樹立するためのプロレタリアートの正規の攻囲軍組織の建設という壮大な事業をこそ、実現せねばならないのである。

以下、正規の攻囲軍建設へむけた当面の任務・方針を提起してゆくが、そうするにあたって、「労戦統一」の基本性格を再度はつきりと確認しておかねばならない。

現下の「労働戦線の右翼的統一」は、世界的市場再分割戦の激化、世界的動乱—階級闘争の激化に規定されたブルジョワジーとその国家権力即ち帝による、その生死をかけた侵略反革命戦争体制づくりの最終局面攻撃としてあることをみてとらねばならない。

プロレタリアートの本隊に排外主義が強制注入されようとしている。経済闘争の一さいの手段が、また政治決起の一さいの手段が、國家暴力装置たる警察と軍隊の役割に壓敵する「労働組合」の手によって奪いつくされようとしている。危機にある日帝の延命のための強制労働、国民総動員が、あるうことから「労働組合」の名によつてくだされようとしているのである。

先進的プロの任務

さて、以上の前提的確認をふまえて、「労戦統一」をめぐる八二年階級攻防戦における

任務を次のとく提起する。

任務の第一は、帝国主義的労働運動と大衆的に分岐した階級的労働運動の基盤を形成することである。

そのための具体的指針の一つは、右翼既成指導部から労働組合の指導権を奪還することである。ひとりブルジョワジーのみでなく、われてきた労働手代が産業報国会の組織者、推進者として労働組合の支配権をさん奪している現在、労働組合の指導権を革命的プロレタリアートが奪いかえすという事業は、いささかも軽視されではならない。労働手代の不正をあばき、本性をあばき、組合員大衆の信頼をかちとり、組合執行権を奪取し、闘争権交渉権、妥結権を現場組合員大衆の手に奪いかえすたたかいが死力を尽して、遂行されねばならない。そのために、今後、一層し烈化するであろう賃金抑制、首切り合理化、労働強化、労働条件改悪などの資本の諸攻撃にたいして、実力をもって決起し、職場末端からの大衆闘争による反撃をしつよう組織し、その妨害者、封殺者としてたちあらわれる労働手代などを組合指導部から大衆的にひきずりおろすことである。

具体的指針の二つは官民をつらぬく労働運動の共闘体をあらゆる地域で形成、強化、拡大してゆくことである。昨一二・一四統一準備会結成以降、ブルジョワジーとその労働手代どもは、残る照準を民間中小労組の戦闘的部分の暴力的解体と、行革攻撃を軸とした官公労働運動の徹底解体に定め、労働運動の実質的最終的解体の攻撃を完成化せんとしてくるであろう。われわれは、官民分断を絶対に許さず、企業や単産の枠をとりはらった各地域での経済闘争を含む共闘を着実に組織し、強力な地域共闘体を構築してゆかねばならない。そのために、条件の存在しているところ

防として存在しているのである。

では、既成の地区評の実質的指導勢力をわれわれが奪いかえすことであり、そうでないところでは、新しい地域共闘体形成をよびかけ、その指導部連絡会議を定期化し、実際的な経済闘争、労働争議の共闘、支援、連帯行動の組織化、さらには節々での労働者政治闘争の共闘の組織化、教宣活動の共闘を実践することである。そして、このようにして形成した企業枠、単産枠をとりはらった地域共闘体は、労働者総数の七割近くを占める未組織労働者を労働組合に組織すること、未組織労働者のたたかいへの全力をあげた連帯のたたかいにとり組まねばならないのである。

任務の第二は、労働組合活動を重視する先進的プロレタリアートは、そのことと同等以上精力を傾けてプロレタリアートの政治決起を組織せねばならないということである。組織すべき政治決起は、究極的にはプロの武装蜂起の組織化へと集約すべきものであり、底辺に広範な人民の闘争を有した革命的政治闘争として連続的に組織されるものである。具体的には、組織すべきプロレタリアートの政治決起の一つは、全人民的政治闘争をなう本隊へとプロレタリア大衆を領導することである。そのためになすべきことは、被抑圧人民諸階層の要求の分散性、闘争の個別性を集中し、統合するにたる政治要求を次の五つの真の大衆的政治スローガンとして高々とかげることであり、組合主義的政治闘争の一切の残しを社民に投げかえし、労働組合や単産の枠を完全にとりはらった政治闘争の戦場を、地域に、そして、全国單一に創出することである。五つのスローガンとは、(1)帝国主義・社会帝國主義の侵略反革命戦争に反対しよう！(2)全世界の民族解放闘争、民族解放のスローガンを基軸にあらゆる戦場で、そこにふさわしいスローガンとして、さらに具体化、豊富化させ、徹底した宣伝、煽動、組織化を大胆にくりひろげようではないか。

そして組織すべき政治的決起の二つは、階級闘争の進路をさし示し、同時に現下にあって不可欠な「広範な人民の政治的統一戦線」を真に保証しうる革命的プロレタリアートによる革命的政治闘争の組織化である。現下の階級攻防はプロレタリア階級の勝利へと道をきりひらくか、それともブルジョアジーへの全面屈服かをめぐる攻防である。にもかかわらずその攻防にプロレタリアートの側から勝利的決着をつけるに不可欠の前衛党建設は、その実際的力量に関して、大きく立ち遅れているという厳然たる事実をも知つておかねばならない。ぞくぞくと発生する社共への屈服

者、右翼日和見主義者たちからレーニン主義前衛党建設を峻別し前進させるために、国際階級闘争の最前線に世界單一党一世界赤軍を建設すること、自国帝国主義をプロレタリアートの武装蜂起をもって打倒しプロレタリア組織する中央集権非合法党と武装せる革命の伝導路を建設すること、というわが国の革命の総路線に關わる旗幟を鮮明にして、断固たる党派闘争の推進でもある革命的プロレタリアート独自の革命的政治決起が組織されねばならないのである。

この革命的政治闘争の組織化は、ひとり原則的党派間の政治共闘の創出にとどまらず全人民的政治闘争の渦中から革命的プロレタリアートを創出し、廣範な人民の政治的統一戦線を創出し、領導しなくため、階級闘争の現状が要求していることである。総評防衛を立場とするグループ（たとえば労働情報内右翼日和見主義者など）とその運動では、それは決して実現しないものなのである。彼らは戦略的、組織的に労働運動、階級闘争を牽引していくことを最初から、みずから任務としておらず、自然発生的な労働運動の代弁者としての位置から一步も出ようとしないからである。

すべての先進的プロレタリアートは八二年ににおいて全力をふりむけて、労働組合内の奪権闘争および政治闘争の組織化とともにになわねばならない。そして、第三の任務としてこの二つの戦場をとおして、その一切の成果をレーニン主義前衛党的建設、武装せる革命の伝導路建設に結実させることである。

大規模な階級流動を眼前にして昨日までの経済主義者が政治闘争を口裏で主張し、解党主義者が党の必要を説きはじめた。まさしくプロレタリアートの一切の闘争の司令部たる革命党の建設が焦眉の課題なのである。しかし

しプロレタリアートが真に必要とする党は綱領サーカルでもなければ、組合内に安住する経済主義者のフラクションでもない。それは武装したレーニン主義者の中核集権非合法党であり、それと結びついで武装せる革命の伝導路である。そうでなければ生死をかけた敵階級のしれつな攻撃にいさかとも耐えることはできないのである。われわれは現下の階級流動のただなかで社共、右翼日和見主義者ときつぱりと分岐し、日帝の支配の危機を革命的危機へと転化するたたかいを首尾一貫して推進し、その最終局面を蜂起一プロ独として組織する司令部としての中央集権非合法党と、党にプロレタリア大衆を結びつける伝導路、蜂起を準備する武装せる革命の伝導路を建設せねばならないのである。党はさまざまにはりめぐらした伝導路を通じて、革命の成熟期において文字通りプロレタリアートの軍事的政治的指導と指揮を貫徹し、蜂起を勝利へ導くものである。この司令部一伝導路建設なく

この司令部一伝導路建設のたたかいは、こんにち、二つの武装を何よりも要求されている。一つは、いまこそ、断固として、非合法組織者としてみずからをうちきたえることである。われわれの現下の攻防は、労働運動の産業報国会化攻撃を阻止するたたかいである。にとどまらず、産報化攻撃のただなかで、敵に捕足されず、敵の反革命暴力に屈することなく、プロレタリアートを宣伝・煽動・組織し、もって、武装蜂起一プロ独の勝利の陣型をつくりあげてゆくための攻防である。それゆえ、合法主義とのたたかい、眞の解党主義者＝軍事組織建設への敵対者との闘争を強化し、非合法活動能力をみがき、軍事能力をもうちきたえねば、現下の、そして、さらに煮つまつた階級闘争の要請にこたえ、プロレタリア大衆の要請にこたえる前衛任務は、いさかも果しようがないからである。

二つには、われわれ革命的プロレタリアートが先頭に立って公然たる、合法的な、眞に大衆的な労働組合の全国的結合を大胆に推進することである。それは、個別資本、労働手代、国家権力との三正面戦をたたかいぬくため既成労組内左派反対派の恒常的全国共闘組織と独立労組、未組織プロレタリアートを貫ぬく大合同労組の建設戦としておしすすめことである。その目的のため一地域、一地方での先行的着手と全国的な協議会の組織化が八二年階級闘争のただなかからかちとられていゆかねばならない。

これらの事業は、こんにちまでわが国の革命的プロレタリアートのいまだ取り組んだことのない壮大なたたかいであるが、現下の産報化攻撃にプロレタリアートの統一行動をもつて反撃するためにも、そして、また、せまりくる非合法時代、敵階級のさらにもむきだしの暴力的なたたかうプロレタリアートへの壊滅攻撃、弾圧に屈せず、力強くたたかいぬくためにも、たちむかうべき階級的任務である。

すべての同志、友人のみなさん！八二年階級攻防戦の要たる労働運動の産報化とのたたかいを死力を尽くしてないぬくなかで、プロレタリア大衆を、その基礎的戦場においてしつかりと組織し牽引しつつ、日帝の侵略反革命戦争とファシズム準備攻撃との真正面からの政治闘争を大胆に組織し、プロレタリアートを最終的勝利へ導く偉大な歴史的橋頭堡を、ともに戦取しようではないか。

すべてのたたかう労働者人民は共産主義者同盟（全国委員会）の旗のもとに結集せよ！

戦争の道を阻め！



三里塚闘争を
反戦平和の砦へ

事務局長 北原鉱治

八二年初頭にあたり、三里塚芝山連合空港反対同盟は「烽火」の機関紙をつうじて、八二年の新たたかいにむけて、八一年の闘争をふりかえり、ここに全国のみなさんの決起を訴える次第であります。

八一年は三里塚現地においては、日本燃料貨車輸送期限切れをめぐっての争議が、動労千葉と全国の労働者には三年前の開港阻止闘争にたいして権力・体制側は、十年から八年という重罪判決をもって、われわれに報復をおこなつてきました。三月にはジェッ

八一年は三里塚の運命をきめるような激動の年でした。公団の切り崩しが成田用水、基盤整備、千代田鉄道延伸という問題でかけられてきました。将来、農業を自立させるためにはそういうことが農民にとって必要なことだという面を、政府公団は突いてきたのであります。

私は政府がどういう考えをもつているか疑問を感じています。行政改革の対象から三里塚空港はのぞかれています。しかしいまのように大型予算をいくら組んでも、現実、成田空港は行きづまっています。旅客は足込み状態からむしろ後退しています。われわれはなぜ成田空港に反対するのか。公共事業であるということで、ずいぶんいじめられたわけです。しかしながら大手資本のために成田空港というの

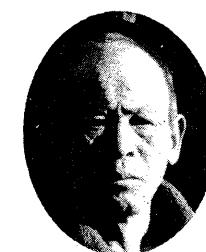
は利用されているわけです。はたして公共事業という名目が成り立つかどうか。それから一部の人から成田空港は軍事空港ではないんだとか、あれは一部の農民のゴネトクだとかいう意見が出ています。いまはつきりしているのはアメリカが最近、日本に軍備増強ということをおしつけているわけです。

自衛隊も増強され、そういうことからみれば三里塚空港というのは、日本が軍事大国化する前兆のうえに工事を急いでいるという感じをもつわけです。三里塚空港は平和的な国際空港だといふことで建設されたけれども、それは猫の目が変わるようどんどん変わっているわけです。

成田空港は軍事空港なんだ、これは最終的に最近の国際的事件からいっても、成田空港は軍事空港という色彩を

委員長代行 石橋政次

軍事空港粉碎を 全人民の力で



三里塚反対同盟の新年アピール

三里塚農民の一部の反対で、この成田空港を廢港にすることは困難です。成田空港に反対する反対同盟の裏がわに全国の国民全体の支援がなかたら空港の粉碎はできません。

空港を粉碎できなから、国民皆兵、国民全体が戦争にまきこまれる危険性があるから、八二年は、まず三里塚に総結集すべきであると考えます。われわれは今まで支援をお願いします。すというようなことをいついたんだけれども、これは支援ではないのです。すべての人が、三里塚空港の問題を自分のものとしてとらえる時期がきているということを、私は訴えたい。

全国の若い力を結集してたたかいぬましょう。

(談)

82年二期決戦の爆発で

きがそれほど重大な価値あるものならば、昨年の三月に切れた燃料貨車輸送の期限についても閣議決定であり、政府はこれを守らねばならなかつたはずです。政府方針としてパイプラインができようができないが、三月をもつて陸上貨車輸送はうちきるという方針をだしておきながら政府は、パイプラインの完成の遅れを理由に、閣議決定を反古にして、ジェット燃料貨車輸送を動労千葉に強要してきたのです。怒りをもたないものはいるだろうか。

会かかぢとらねました、十月十一日には、再度現地集会が開催され、一一五〇〇人という多くの人々が三里塚に結集したのです。十五年前の十月十日という日をふりかえってみると、空港の工事着工開始という方針にもとづいて、機動隊を前面におし

三里塚と共に正義の道、唯一筋に生き抜く人間として日常闘争に専念される皆さんに、白梅部落反対同盟より年頭にあたり決意新たに共闘と連帯の挨拶を送ります。

里塚闘争正念場の年を、動労千葉ジエット闘争を皮切りに、裁判闘争に裁判闘争を積み重ね、又、芝山町の町長選騒特法攻撃と真正面から闘い、二期工事阻止の為、皆さんと共に、全国労農学組織を結集して三里塚の闘いに勝利の展望を築きつつ、全国、否、全世界の労働者との交流の場をも持つ事の出来る三里塚に発展した八一年闘争として闘い抜かれた事を、皆さんと再確認したいと思います。

八二年闘争の夜明けは来た。敢然と勝利の年として頑張り抜きましょう。過去十六年間の戦いの成果を踏まえ、



八二年を 人民の勝利の年に

白桦部落
笛川英祐

闘いの犠牲者の意志を引継ぎ、二期工事用地内の騒音下住民と一体と成り、着工阻止の闘いに突入せんと意義を堅持して居ります。是に対し全国の労農学の尚一層の強固な結集力と各地域の事を表明して挨拶とします。

在労働者の右傾化策動を軽視する事なく、軍事大国化阻止の拠点は三里塚で

にたいして防衛予算の増額、軍事力強化をおしつけてきています。これにたいして鈴木内閣は、立場上米国に拒否されることはできず、軍事費はますます膨大なものとなり、軍事大国化と専制の道へと歩もうとしています。安保のもとで日本列島の平和空港は存在しない。

と思つております。
まず八二年の全国住民闘争の夜明け
は、さらなるたたかいをもつて三里塚
から切りひらきたいと思つております。

たし夕暮のクイズかねこなわれた日
です。この日、われわれははじめて機
動隊とのぶつかりあいのなかで逮捕者
をだし、婦人行動隊から重傷者をだす
という実力闘争への転換の記念すべき
日がありました。

ながにある米軍基地・自律隊基地に対する
で核が持ちこまれているという現状のなかで、日本は再び戦争の道へと歩みつあるということを、私たちは正きわめなければいけないのでないだろうか。

三・二八全國闘争に決起せよ

討論においては、このかんの各地区での実践を背景にして、タカラブネ労研からは地域共闘形成の緊要性の問題、高槻合同労組からは未組織労働者の組織化の問題、また労働者活動者会議、十・二〇教組実行委の二団体からは「反労戦統一」のたたかいの任務の第一はプロレタリア国際主義的政治闘争としてこれを展開することにある」という観点からの、安保改憲にたいする闘争を軸とした政治闘争の重要性の問題などが、それぞれ提起された。

右翼的労戦統一粉碎闘争を革命的に牽引しぬく内実を、共同の力でつくりあげていくことを目標にして成功をおさめたこの集会の意

義は大きい。さらに八二年の全過程で、この成果を拡大し発展させていくことが問われている。

タカラブネ労働組合およびかけで形成された集会実行委には、全金自治労・全国一般・新産別などに属する十二の労働組合と有志が参加し、地域での共闘を再建して京都でおこなわれた二つの労働者集会である。

◎ 洛南地区労働者集会
さる十一月六日、京都南部・久御山地区の労働者を中心に「労戦統一とは何か? 地域共同の闘いを

◎ 右再編反対京都集会
洛南集会の成功をうけて、十二月成功をおさめた。

◎ 右再編反対京都集会
本二四支部二七〇名の結集にしめられたように、労働者の下からの仲間からの問題提起もあり、今後新たな共同の出発を画すうえで大きな成果をおさめた。

十二・十京都集会は、全金京滋地大会で、この成果を拡大し発展させたものと、「労働戦線の右翼的再編に反対する京都集会」が開催された。集会は、全金京滋地本山田氏の開会宣言にはじまり、タカラブネ労働組合の決意表明、全港湾関西地本の山本敬一氏のあいこうという確認のもと、精力的な組織化がすすめられた。集会で反対する大衆的集会がとりくまれている。ここに紹介するのは昨年京都でおこなわれた二つの労働者集会である。

タカラブネ労働組合の決意表明、全港湾関西地本の山本敬一氏のあいこうという確認のもと、精力的な組織化がすすめられた。集会で反対する大衆的集会がとりくまれている。ここに紹介するのは昨年京都でおこなわれた二つの労働者集会である。

◎ 洛南地区労働者集会
さる十一月六日、京都南部・久御山地区の労働者を中心に「労戦統一とは何か? 地域共同の闘いを

◎ 右再編反対京都集会
本二四支部二七〇名の結集にしめられたように、労働者の下からの仲間からの問題提起もあり、今後新たな共同の出発を画すうえで大きな成果をおさめた。

十二・十京都集会は、全金京滋地大会で、この成果を拡大し発展させたものと、「労働戦線の右翼的再編に反対する京都集会」が開催された。集会は、全金京滋地本山田氏の開会宣言にはじまり、タカラブネ労働組合の決意表明、全港湾関西地本の山本敬一氏のあいこうという確認のもと、精力的な組織化がすすめられた。集会で反対する大衆的集会がとりくまれている。ここに紹介するのは昨年京都でおこなわれた二つの労働者集会である。

闘争、団結、そして勝利を!

八二年にあたっての全国への檄

「復帰」十年の奮闘する!

(沖縄地方委員会)

沖縄は七二年五・一五「返還」から十年目を迎えるとしている。「復帰」十年目の本年八二年が、敵日帝国家権力と沖縄労働者人民との、十年間の総決算をかけた激しい階級攻防の年となるのは必至である。われわれは反戦反基地反安保闘争を一貫して堅持しつづけてきた沖縄労働者人民とともに、八二年を沖縄闘争の新たな起点とすべく奮闘する決意である。

「復帰」十年は、いかなる意味においても沖縄問題の解決をもたらさず、沖縄人民の生活破壊、沖縄への差別抑圧支配のいっそうの強化へと帰結した。なぜか。それはそもそも七二年「返還」が、沖縄人民の戦後二七年間にわたる過酷な米軍政支配からの脱却の願いをも逆利用しつつおこなわれた、日本帝国主義によるアジアへの侵略反革命の全面化ための攻撃であったことに起因している。帝国主義者にとっての「沖縄問題」とは、あくまでも施政権の問題であり、軍事基地の新たな再編強化の問題であり、沖縄人民の全生活はこれに徹底して従属させられるべき問題とし

てのみ存在したのである。

こんにち帝國主義の世界的危機激化のなかで、日米帝による沖縄を朝鮮・アジア・中東にむけた直接出撃基地として強化しようとする攻撃が吹き荒れている。緊急展開部隊(READY FORCE)の主力である在沖米軍の激増する軍事演習は、沖縄の山野をじゅうりんし、人民の生活権をおびやかし、日帝は基地確保のために本年五月十四日の公用用地法期限切れをひかれ、人民からの土地の強奪に血道をあげている。また軍事的目的をともなって増設されづけるCTS(原油備蓄基地)の林立するタンク群は、日々海を汚染し漁業を破壊しつづけている。これが「復帰」十年の現実の書き尽くせぬ一端である。

日帝ニ西銘県政は、この現実をとりつくろわんがために本年五・一五の屈辱的記念日を「お祭り」一色でぬりつぶし、戦争と差別の元凶である天皇の沖縄上陸をもくるんだ。天皇の訪沖策動こそ、敵の側からする「復帰」十年の総決算的攻撃であり、沖縄人民を再び戦争へと動員するための決定的攻撃である。しかし沖縄人民はこれを許はしない。西銘は昨十二月七日、「県内で思つたほどの(天皇)歓迎の盛りあがりがない。治安の万全がえられない」と、天皇来沖断念を発表せざるをえなかつたのである。

基地とCTS、そして天皇上陸策動に象徴される日帝の死活をかけた攻撃にたいして、戦後の土地闘争をはじめ戦闘的伝統を築きあ

げてきた沖縄労働者人民はいま、日本帝國主義打倒を真正面から掲げる沖縄闘争の再建の道にふみだそうとしている。そしてこれを領導する社共と分岐した新たな指導部を建設するための苦闘の途についた。われわれはこれと連帯し、「沖縄闘争の風化」と称される過渡的現実を打破し、五・一五闘争を頂点に、八二年を沖縄闘争の一大飛躍の年とせねばならない。

一九八二年の暮あけを迎え、高槻地域合同労組から新年のあいさつを送ります。

私たち高槻地域合同労組は、昨年九月二〇日に結成されたばかりの組合です。

未組織故に労基法さえ無視した過酷な職場から、そして労働組合をもちながらも、労資一体化の中で組合自身に闘いを弾圧される組合労働者の仲間が集まって、合同労組結成のはこびとなりました。

未組織労働者は次のように決意をのべています。「仕事をためにつかはれて、身も心もぼろぼろにして一日が終る。次の日も同じことのくり返しだ。もうこんな生活はいやだ。

合同労組の闘いで人間らしい生活をとりもどしたい」と。我国における労働組合とその闘いは一企業を単位として組織されているところにその特徴があります。したがって大企業では家族的な経営や、少人数であることから労組を作り運営していく条件がないといつても過言ではありません。したがって、一企業内で労組を作りたくても作れない現状があります。私たちは、日本の労働者の七割を占める未組織労働者の闘う武器として合同労組を作ることを確認してきました。そして組織労働者からは力強くこの闘いに連帶していくことと、又今日の右翼的労戦統一の中で既存の組合自身によって労働者の闘いがつぶされることに対し右翼的労戦統一と闘う階級的労働運動を未組織労働者との團結で作ることが確認されました。

私たちはこの組織ー未組織労働者の團結が今着実に強化されつつあることを報告します。私たちはこの團結で八二年にのぞむことを決意します。本年が労働者にとっても資本にとっても激動の年となることは明らかです。安保ー自衛隊の強化、改憲攻撃、統一準備会発足を中心とした右翼的労戦統一の具体化など、私たちをとりまく情勢は確実に戦争への道、ファシズムへの道を進んでいます。私たちはこの八二年を「組織ー未組織労働者の團結を作ろう！産報化の道右翼的労戦統一と闘おう！戦争とファシズムの準備と闘おう！」を合い言葉に階級的労働運動を前進させる決意です。全国の労働者のみなさん／烽火読者のみなさん／闘う労働者の團結を求めて、共に闘い抜くことを決意し、新年のあいさつとします。

階級的労働運動の前衛として！ (タカラブネ労研)

全国の烽火読者のみなさん。タカラブネ労働運動研究会より新年アピールを送ります。

現在、日本労働運動はきわめて重大な局面に直面しています。すなわち、侵略反革命戦争にひた走る日本帝国主義に対決する労働運動を組織するのか、それとも日帝に屈服し、戦争とファシズム準備に協力していくかの選択が、進行する右翼労戦統一への態度をめぐり問われています。

私達労研は、日帝に対決する労働運動を組織すべく、同盟・JC・民同右派による右翼的労戦統一に対して、一貫して最先頭に立つて対決してきました。昨年の一一・六洛南地域労働者集会をはじめとして一二・一〇(京都集会)、一二・一二全関西労働者討論会、一二

合同労組の闘いで人間らしい生活をとりもどしたい」と。我国における労働組合とその闘いは一企業を単位として組織されているところにその特徴があります。したがって大企業では家族的な経営や、少人数であることから労組を作り運営していく条件がないといつても過言ではありません。したがって、一企業内で労組を作りたくても作れない現状があります。私たちは、日本の労働者の七割を占める未組織労働者の闘う武器として合同労組を作ることを確認してきました。そして組織労働者からは力強くこの闘いに連帶していくことと、又今日の右翼的労戦統一の中で既存の組合自身によって労働者の闘いがつぶされることに対し右翼的労戦統一と闘う階級的労働運動を未組織労働者との團結で作ることが確認されました。

私たちはこの組織ー未組織労働者の團結が今着実に強化されつつあることを報告します。私たちはこの團結で八二年にのぞむことを決意します。本年が労働者にとっても資本にとっても激動の年となることは明らかです。安保ー自衛隊の強化、改憲攻撃、統一準備会発足を中心とした右翼的労戦統一の具体化など、私たちをとりまく情勢は確実に戦争への道、ファシズムへの道を進んでいます。私たちはこの八二年を「組織ー未組織労働者の團結を作ろう！産報化の道右翼的労戦統一と闘おう！戦争とファシズムの準備と闘おう！」を合い言葉に階級的労働運動を前進させる決意です。全国の労働者のみなさん／烽火読者のみなさん／闘う労働者の團結を求めて、共に闘い抜くことを決意し、新年のあいさつとします。

私たちはこの團結で八二年にのぞむことを決意します。本年が労働者にとっても資本にとっても激動の年となることは明らかです。安保ー自衛隊の強化、改憲攻撃、統一準備会発足を中心とした右翼的労戦統一の具体化など、私たちをとりまく情勢は確実に戦争への道、ファシズムへの道を進んでいます。私たちはこの八二年を「組織ー未組織労働者の團結を作ろう！産報化の道右翼的労戦統一と闘おう！戦争とファシズムの準備と闘おう！」を合い言葉に階級的労働運動を前進させる決意です。全国の労働者のみなさん／烽火読者のみなさん／闘う労働者の團結を求めて、共に闘い抜くことを決意し、新年のあいさつとします。

私たちはこの團結で八二年にのぞむことを決意します。本年が労働者にとっても資本にとっても激動の年となることは明らかです。安保ー自衛隊の強化、改憲攻撃、統一準備会発足を中心とした右翼的労戦統一の具体化など、私たちをとりまく情勢は確実に戦争への道、ファシズムへの道を進んでいます。私たちはこの八二年を「組織ー未組織労働者の團結を作ろう！産報化の道右翼的労戦統一と闘おう！戦争とファシズムの準備と闘おう！」を合い言葉に階級的労働運動を前進させる決意です。全国の労働者のみなさん／烽火読者のみなさん／闘う労働者の團結を求めて、共に闘い抜くことを決意し、新年のあいさつとします。

全國を貫く 学生運動の 再建へ！ (京都学生戦線)

全国のたたかう学友諸君／八〇年代に入つてわが国階級闘争は、右翼的労戦統一をめぐつて巨大な運動期にさしかかっている。この風のなかから、社会主義にむかう階級闘争の真に牽引者となりうる革命的学生運動を創建

・一三全国集会など、右翼的労戦統一と対決する階級的労働運動の陣型を組織してきました。

そして、その間明らかとなつたことは、文字通り資本と一体となつた闘う労働組合・労働者を圧殺するための「労戦統一」であることです。同盟・JCを筆頭とする部分は労働組合としての権利すら放棄し、年々苦しくな一方の労働者の生活を、労働者の武器＝ストライキを打ってでも守ろうとするのではなく、反対に資本とともに抑圧し、超過利潤のおこぼれをもらってよしとしています。一二・一四統一準備会の権力一機動隊に守られたからが本当の闘いであり、労働運動の中に左からの分岐を持ち込む事、階級的労働運動の確固とした潮流を作り上げる事にこそ勝利の帰趨がかかっていると考えます。

私達は、このような事實をふまえ、更なる前進をかちとらねばならないと考えています。それは、総評労働運動の分解と歴史的破産が明らかになつてゐる現在、とりわけ重要なことだと考えます。この右翼的労戦統一に真に対決するためには、「総評を守れ！」ということではまったく無力です。それでは何をなすべきなのか。私達は、新しい道、すなわち階級的労働運動の創出、新たなナショナルセンターをも展望しなければならないと考えます。

私達は、階級的労働運動の創出を、①大衆的実力闘争②職場末端からの闘争③現場闘争主義④地域共闘体の創出⑤未組織労働者の組織化⑥国際主義につらぬかれた全人民的政治闘争の大衆的推進を軸として進めねばならないと考えています。

私達は、階級的労働運動の創出を、①大衆的実力闘争②職場末端からの闘争③現場闘争主義④地域共闘体の創出⑤未組織労働者の組織化⑥国際主義につらぬかれた全人民的政治闘争の大衆的推進を軸として進めねばならないと考えています。

第三に、労働運動の産業報国会化攻撃と対決し、先進的労働者とともに階級的労働運動を創出するたたかいの先頭に起とう！そして、その基礎のうえに、戦争準備・ファシズム準備と対決する広範な人民の政治的統一戦線を建設する壮大な事業に結集しよう！将来のプロレタリアートである学生こそ、このたたかいでとおして自己を階級闘争の主体へと学生の時代から建設していくことが問われているのだ。

第三に、第一次的な團結体の内部から、社会主義への結集に向けた広範な理論運動を創出していくことである。青年学生こそが、こんにちの「社会主義の分裂」に対し確固たる立場を形成し、社会主義にむかう全世界の階級闘争の前進闘士となっていく任をその双肩に先頭に立つてひきうけていくことを要請されているのだ。

自己の前進をかけてプロレタリアートの前衛建設に主体的に結集し、自治会運動の深部から党へといたる赤い血管、武装せる革命の伝導路をこのたたかいのなかから建設していくこう！

するために、ともに奮闘しよう！

七〇年代後半八〇年代初頭、戦争とファシズム準備の時代における新たな学生支配がその姿をむきだしにしてきた。七八年四・二〇通達以降、あいつぐ学生処分、学則改悪、廃棄攻撃などがうちおろされてきた。また、ファシズム学生運動の台頭が進行してきた。八〇年秋、日大文理における反憲学連の武装登場、八一年秋、京都産業大学における文連自治破壊攻撃はその最も顕著なものである。産大においては昨十一月九日、右翼生長の家II反憲学連の暴力的支配下で唯一たたかう学友の拠点でありつづけてきた文連に対し、突如ライキを打ってでも守ろうとするのではなく、反対に資本とともに抑圧し、超過利潤のおこぼれをもらってよしとしています。一二・一四統一準備会の権力一機動隊に守られたからが本当の闘いであり、労働運動の中に左からの分岐を持ち込む事、階級的労働運動の確固とした潮流を作り上げる事にこそ勝利の帰趨がかかっていると考えます。

私達は、このような事實をふまえ、更なる前進をかちとらねばならないと考えています。それは、総評労働運動の分解と歴史的破産が明らかになつてゐる現在、とりわけ重要なことだと考えます。この右翼的労戦統一に真に対決するためには、「総評を守れ！」ということではまったく無力です。それでは何をなすべきなのか。私達は、新しい道、すなわち階級的労働運動の創出、新たなナショナルセンターをも展望しなければならないと考えます。

私達は、階級的労働運動の創出を、①大衆的実力闘争②職場末端からの闘争③現場闘争主義④地域共闘体の創出⑤未組織労働者の組織化⑥国際主義につらぬかれた全人民的政治闘争の大衆的推進を軸として進めねばならないと考えています。

私達は、階級的労働運動の創出を、①大衆的実力闘争②職場末端からの闘争③現場闘争主義④地域共闘体の創出⑤未組織労働者の組織化⑥国際主義につらぬかれた全人民的政治闘争の大衆的推進を軸として進めねばならないと考えています。